

令和 7年度 結果の分析及び今後の改善策

中間・最終

函城中学校区 校番 19 学校名 函城小学校

重点	d 中期(3年間) 経営目標	e 短期(今年度) 経営目標	l 結果の分析 (結果と課題をこう考えます)	m 今後の改善策(案) (こう改善します(案))
<p>確かな学力の向上</p> <p>① 貴</p>	<p>学力の向上</p>	<p>基礎・基本の徹底</p>	<p>国語科・算数科の単元テスト知識・技能の平均点は81.3で目標値を達成することができた。しかし、内訳で見ると国語科78.5、算数科84.1となっており、国語科では80%を下回っている。このことから、言葉の学習の定着に課題があると考ええる。</p> <p>AIタブレットドリル(キュビナ)のWAU率は79%で目標値を達成することができなかった。これは2年生～6年生のWAU率はほぼ100%であったが、6月の段階では1年生がまだタブレットドリル(キュビナ)の活用を始められていなかったためである。</p>	<p>教科や学年の発達段階に合わせて視覚化、焦点化、構造化した具体的な手立てを工夫し、学習規律の定着を図る。</p> <p>言葉の力の定着を図るために、新出漢字や一つ一つの言葉について、意味を正しく捉えさせたり、言葉と言葉の関係を捉えさせたりすることを大切にしていく。</p> <p>学力の定着のために、授業の時間配分を意識して練習問題の時間を確保することは継続していく。</p>
		<p>思考力・判断力・表現力の向上</p>	<p>国語科・算数科の単元テスト思考力・判断力・表現力の平均点は81.4で目標値を達成することができた。しかし、内訳で見ると国語科85.4、算数科77.4となっており、算数科では80%を下回っている。しかし、算数科の知識・技能の平均点は84.1であったことから、基本的な計算の技能は身に付いている文章問題になると正しく解答することができにくい児童が多い。文章問題では、特に場面把握や立式に課題がある。</p>	<p>タブレットドリル(キュビナ)の活用に関しては、1年生では7月から活用を開始している。児童の活用状況を教員が把握するようにし、把握したことを基に個別の指導をしっかりと行い、適切な活用をさせる。</p> <p>文章問題において自力で場面把握や立式をする力を付けるために、分かっていることや求めること、それぞれの数の意味等の情報を整理させ、算数用語を用いたり、言葉の式で思考させたり、図や表などに視覚的に表して問題場面とそれぞれの数を結び付けて思考させたりする。その上で、一人一人が自分の考えを筋道立ててノートに書いて、説明し合ったり深め合ったりできるよう学び合いの場を設定する。</p>
<p>豊かな心の育成</p> <p>① 貴</p>	<p>自尊感情の向上</p>	<p>自他を大切に認め合う児童の育成【いじめの防止】</p>	<p>自分にはよいところがあると思っている児童の割合は86.1%で目標値を達成することができた。しかし、内訳で見ると高学年になるにつれて85%を下回っている。これは、高学年になり他者と比較したり、自分を客観的に捉えたりして自己評価が厳しくなる傾向があるためではないかと考える。</p> <p>いじめは、どんなことがあってもいけないことだと思える児童の割合については、99.2%で達成できなかった。いじめの定義についての理解ができていないことが要因である。</p>	<p>引き続き児童が自分のよさに気付けるように、日々の生活の中で苦手なことでも頑張っている姿や他の教師から聞いたよいところを伝えていったり学級の中でお互いのよいところを伝え合う場を設けたりする。縦割班活動の振り返りの充実を図り、子供同士の評価につなげていく。</p> <p>いじめに関しては、「相手がいじめられたを感じるようなことがあれば、それがいじめである」といういじめの定義について折に触れ伝えていと共に、善悪の判断ができるように粘り強く指導をしていく。</p> <p>日頃から児童と話をしたり様子をしっかりと見たりして、少しの変化に気付くようにするだけではなく、家庭や地域からの情報にアンテナを張って未然防止をしていく。</p>
		<p>主体的に行動できる児童の育成</p>	<p>将来の夢や目標をもっている児童の割合は90%で目標値を達成することができた。しかし、内訳で見ると高学年になるにつれて90%を下回っている。これは、社会とのつながりが徐々に意識され、将来と今の自分を客観視できるようになってきているからではないかと考える。</p>	<p>今後も引き続き、キャリアログや二川の振り返りカードを活用しながら、一つ一つの活動の取組の評価を丁寧に行い、成長している自分に気付けるようにしていく。また、日々の体験や学びの全てが自分の将来の選択肢を広げることにつながっていることを伝え、児童の内面を耕していくようにする。</p>
<p>健やかな体の育成</p> <p>① 貴</p>	<p>生きる力の向上</p>	<p>体力の向上</p>	<p>運動が好きだと肯定的に感じている児童の割合は91.9%であった。外遊びの啓発もあり、外へ出て遊ぶ児童が多く見られた。一方で外へ出るだけで遊んでいない児童も一定数見られた。夏季は暑さ指数が非常に高い日も多く、外で遊べない日が増えてしまった。くれチャレンジマッチについても、運動会後暑さ指数の高い日が続き、なかなか取り組む時間を確保することができなかった。</p> <p>生活習慣調査において、望ましい生活習慣ができた児童の割合は89%であった。内訳で見ると、「学年の目標時間までに寝た」という項目(低学年79.2%・中学年85%・高学年84.3%)は特に低学年が低い。また、「ねる1時間前にメディアをやめた」という項目(低学年87%・中学年75%・高学年94%)は特に中学年が低い。</p>	<p>外へ出るが遊びに対して積極的に出来ない児童が一定数いるため、体力安全委員会の児童や教師から運動遊びを積極的に紹介したり、体育の授業で取り入れたりしながら、運動が楽しいと感じられる機会を増やしていく。また、くれチャレンジマッチや屋内で手軽にできる運動遊びなどについても計画的に取り組んでいく。</p> <p>2学期のにこにこカードを始める前に、各教室で養護教諭が作成した保健指導用資料を用いて、1学期の結果の振り返りを行い、課題意識を高める。また、2学期の集計後、生活習慣の気になる児童には養護教諭が個別に保健指導を行い、意識を高められるようにする。</p>
		<p>自分の命は自分で守る力の育成</p>	<p>自分が住む地域に起こりやすい災害について理解している児童の割合、災害時に避難する場所や避難の仕方について理解している児童の割合はともに100%であった。定期的確認することで、子ども達の意識に定着してきていると考えられる。防災に関する掲示や通信の発行、土砂災害対応携帯マニュアルや地震・津波対応携帯マニュアル、ひろしまマイタイムラインなども活用することで、意識して話をする家庭も増えている。</p>	<p>家庭を巻き込んだ防災教育を推進し、自分の命は自分で守る意識を醸成していくために、2学期以降も防災参観日の実施や発達段階に応じた取組を継続していく。対応携帯マニュアルも活用し、日々子供たちが防災を意識して過ごせるようにしていく。</p> <p>避難経路の使用不可、けが人の発生の想定等、実践的な避難訓練を継続して実施していくことで、自分の命は自分で守る意識を高められるようにする。</p>
<p>業務改善</p>	<p>意欲と能力を発揮できる教育環境の整備</p>	<p>児童と向き合う時間の確保</p> <p>長時間勤務の削減</p>	<p>児童と向き合う時間が確保されていると感じる職員の割合は90%で、日々の業務に充実感が得られている職員の割合も同じであった。生徒指導事案や行事への対応など多忙感はあるものの児童としっかり向き合い、やりがいをもって業務に取り組んでいる。</p> <p>4月から7月までの累計で延べ45人のうち、11人が時間外在校等時間が45時間以上となった。転勤や担当学年が変わり、慣れない業務となったことが原因であると考えられる。</p>	<p>授業改善への取組や積極的な生徒指導を組織的に行うことで、児童と向き合う時間を確保し、業務へのやりがいを高めるようにしていく。</p> <p>2学期以降の業務内容を夏季休業中に行うなど見直しをもって業務に当たるようにする。また、在校時間の状況についての個人票を配付することで、自身の時間の使い方を振り返るきっかけとし、自己のタイムマネジメント力を向上させる。</p>